

第17回大会報告記

大道千穂

第17回日本アイリス・マードック学会は、2015年11月21日（土）に青山学院大学（東京都）で開催された。美しく色づいたキャンパスの銀杏の葉が青空に映える秋晴れの一日となった。午後12時30分から総会があり、塩田勉会長から研究発表者、参加者への感謝と新会員の方々への歓迎の辞があった。第17回目にして初めて海外からの発表者をお迎えし、会場はいつにもまして華やかな雰囲気にもまれていた。

次に井上澄子副会長から午前中に開かれた理事会の報告があった。報告内容は以下の三点である。第一に、来年度の開催校は愛媛の四国学院大学あるいは東京の明治学院大学、開催日は未定だ

が10月が望ましいということになった。第二に、2016年1月1日から塩田先生の任期満了に伴いポール・ハラ先生が会長に就任されることが決まった。任期は二年である。第三に、現理事である榎本眞理子先生、高橋和久先生に代わり大槻美春先生、中西ウエンディ先生が理事になられ、大槻美春先生、大道の代わりに内藤亨代先生、中窪靖先生が監事になられることが決まった。

事務局からは、任期を終えられる塩田会長に対する謝意が伝えられた後、住所変更などについてはすみやかな連絡をしてほしいとの依頼があった。来年の学会の企画について提案などがあれば事務局に知らせてほしいとの依頼もなされた。

会計担当者から2014年の収支決算報告、ならびに2015年の予算案、中間報告があり、了承された。また、5000円の賛助金を寄せてくださった新入会員の有馬弥子氏に感謝の意が表された。

発表は全部で5本あった。中西ウエンディ先生のご発表、'The Insider Outsider in Iris Murdoch's *Bruno's Dream* and Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*' は、アイルランドに生まれイギリスに育ったマードックと、日本に生まれイギリスに育ったイングリッドがともに持つ自らのアイデンティティに対する複雑な思いが、ブルーノとステューヴンズという共通項の多いキャラクターを生み出したことを鮮やかに分析するものであった。インサイダーでありながらアウトサイダーであるという立場の孤独と希望を追求したご発表は聴衆の心を強く惹きつけた。

アメリカ、特にアジア系アメリカ文学に造詣が深い有馬弥子先生によるご発表、「ディアスポラとしてのジャクソンがもたらす攪乱と解放」は、ジャクソンとは誰なのかという出版当初からの議論に新たな視点を加えるグローバルな大きさをもったご発表だった。ジャクソンの中に南アジア系ディアスポラの特徴を見出す有馬先生の視点にこの小説の新たな可能性を発見する貴重な体験となった。

『ケルズの本』からの繊細で鮮やかな図像の数々を散りばめたスライドを使われての井上澄子先生のご発表、「*The Book and the Brotherhood* に描かれる連続性について」は圧倒的な美しさで聴衆を虜にした。この小説の“The Book”を聖書と解釈された先生は、小説内にて執拗に登場する渦巻き、螺旋のイメージを拾い出し、この小説の一見きわめて俗世的なストーリーが、実は『ケルズの本』の宇宙観の表現であることを証明された。マードックの作品が、大胆な実験性と果てしない広がりを持つ『ユリシーズ』にも似た物語であることが紐解かれていく興奮に満ちた時間であった。ジョイスもまた、『ケルズの本』に強く惹かれていた作家の一人であったということだ。

哲学をご専門にされているエスター・モンテレオーネ先生のご発表、'Iris Murdoch and the Women Philosophers of Oxford' は、マードック

の哲学を20世紀後半のオックスフォードを拠点とする女性哲学者たちの思想史の中に位置づけようとするものであった。先生のご説明により、私たちはマードックの思想が^{インナーライフ}精神生活を重要視する点において同時代に主流であった論理実証主義とは一線を画すものであり、そのスタンスが彼女の時代にオックスフォード大学で活躍した多くの女性哲学者たちと共通することを私たちは理解した。「個」「善」「徳」という三つのキーワードと、こうしたキーワードを包み込む宗教という領域のマードック哲学における重要性が示されたことで、聴衆は改めてマードックの小説が彼女の哲学と密接に絡み合い、結びついていることを確認した。

研究発表はフィオナ・トムキンソン先生による 'Are Iris Murdoch's foxes Japanese? Kitsuné myth and Zen Buddhism in *The Philosopher's Pupil* and *The Message to the Planet*' で締めくくられた。マードックも知っていたかもしれないという12世紀日本の狐に関する伝承と、彼女の2作の小説に現われる狐や狐の比喩の類似性を指摘しながら丁寧構築された議論は、マードックのみならず、外国人研究者の日本への深い関心を確信させてくれた。総じてイングランドの知的中心地に腰を据えて創作活動を続けたマードックが、いかにグローバルな視野を持っていたかを再確認させられる学会となった。

学会の最後を飾ったのは野中涼先生による特別講演、「アイリス・マードックの衝撃」であった。戦後日本において若者たちが心の渇きを潤すように外国の小説にのめりこんでいった様子、そうした青年たちの一人であった先生ご自身の小説への思いが、報告者の目には映画かドラマをみているように映し出された。1970年代生まれの報告者は、日本人の活字離れがメディアの関心すら呼ばなくなるほど当たり前になってから生まれた世代だ。先生が紡がれるお話は異世界のものであり、惹きこまれた。人間の「善」を信じそれを説くマードックを読むに至るまでの、戦争を経験したものであるが故の葛藤、読んでみて受けた衝撃、そして途方もない想像力が生み出すありえないプロットに対するちょっとした失望と、現実の些細なものの価値を認めるモダニズム小説への関心の

転化。どれも貴重なお話であった。

学会終了後、大学横のアイビーホール（青学会館）にて懇親会が行われた。野中先生、そして海外からいらした発表者お二人のご参加を得ること

もでき、英語と日本語が入り混じる約2時間の楽しいひとときがもたれた。開催校委員を引き受けるのは初めてで、至らないところも多々あったと思う。皆様方のあたたかなご協力に感謝したい。